# ブレントでの障碍児へのサポート(2)

## ―ある障碍児のための学校とそのアフタースクールクラブのこと―

清原　規子

私は、昨年の秋から障碍児のための小学校（マナースクール）内で活動しているアフタースクールクラブ（一般的には日本でいう学童）のプレイワーカーとして働き始めた。それぞれの場所によってやり方などが違っていると思うが、私が働いている所の話が出来れば、と思う。

### ブレント区の学校事情

現在ブレント区内には、約五十校の小学校と七校の中学校があり、公立の他、イギリス国教会、カトリック、ユダヤ人のための学校、イスラム教によるものなど多様で、ジプシーのように移動しながら生活している子どもたちのための特別な学校もある。

多国籍の子どもたちが通う学校での、もっとも大きな課題の一つは言語ではあるが、実際には子どもたちは吸収するのも早いので、英語に慣れ親しみ、逆に親のために通訳をする場面などが見られたりするようである。学校の先生を選ぶのに、それぞれの国籍を持っている人を採用しているのも、子どもにとっては安心できる環境であるのかもしれない。

スペシャルニーズの子どもに関しては、基本的には、他の子どもたちと同じ学校に通学するが、各学校にはＳＥＮＣＯ（Special Education Needs Co-ordinator）という責任者がいて、その子どもたちへのサポートが適当か、自分の学校で彼らのニーズをどこまでサポートできるかなどを、担任らと共に考えている。さらに特別な助けが必要な子どもたちに対しては、担任、ＳＥＮＣＯ、親などが福祉の専門家とも話し合いをしながら、障碍児のための学校に通学させることによって彼らのサポートをたしかなものにし、子どもの発達・変化によっては、他の子どもたちが通っている学校に再び転校することもあるようである。

## マナースクールのこと

私が現在通勤している学校の建物は、百年前にやはり小学校として建てられたものを使用していて、かなり大きく、外観はどっしりとして歴史を感じさせる。各クラスの教室の他、他の小学校と同じように講堂、音楽室、図書館、美術室、保健室、コンピューター室等がある。スピーチセラピー室や作業療法室では、フルタイムで働いている専門家によって、子どもへのセラピーが行なわれている。室内プールもあって、どんな形でかはわからないが、放課後は毎日、子どもたちのために開放されているようで、親子で来ている姿を多く見る。

子どもたちは四歳から十一歳、学習をする上にお

いて困難をきたす子どもたち―学習障害のある・あるいは複雑なニーズのある・特別に言葉に関する問題のある・自閉症児等―が通ってきている。イギリスでの通学は、親による送迎が普通だが、この学校はブレント区によって運営されている送迎バスを利用している。

一クラス五人から十人（年齢混合）、それぞれのクラスには、担任とアシスタント（子どものニーズによっては、一対一のアシスタントも配置されている）がいて、授業の科目自体は他の学校と同じだが、一人一人のプランをそれぞれのニーズに合わせて作っている。そして、各学期ごとに先生たちがそれを確認、再考している。ユニークで、かつ、職員同士のコミュニケーションあるいはサポートにも役立っていると思われるのは、十四ほどあるクラスを三つのチーム―四歳から七歳のチーム、七歳から十・十一歳のチーム、自閉症児（自閉的傾向も含む）のチーム―に分け、チームごとに定期的に話し合いを行っていることである。

セラピーは、スピーチ（あるいはラングエージ）セラピーや作業療法の他、専門家によるアートセラピー、ミュージックセラピー等も取り入れ、特にコミュニケーションの発達に重きを置いている。

子どもたちにいい教育を行なうためには、親と学校との関係がとても大切だということで、一年に一回の親と学校の全体での話し合いと一年に二回の担任との話し合いの他、担任とのコミュニケーションの手段である週に一度のリンクブック、誰でも参加できる定期的な「コーヒーモーニング」―日本でいう井戸端会議的なもの―も行なっている。

## マナーアフタースクールクラブ

ロンドンでアフタースクールクラブというと、親が仕事のために家に戻ってきていないので、六時頃

まで子どもたちがそこに集まり、遊んだり、宿題をしたりする場所であり、さらにいえば、学校教育という枠や年齢を越えて人と関わり、人を知り、自分を知っていく場所のことを一般的に指す。それは日本での学童に当たると思われるが、私の働いている所は障碍児のための学校ということもあって、目的や運営方法が少し違う。

まずは目的だが、働いている親のためという部分には重きを置いていなく、子どもの好きな分野、得意な分野を発揮できるようにと始められたようである。運営については、他の所は、週五日三時三十分から六時あるいは六時三十分までやっているのに対し、マナースクールは、月曜日から木曜日までの週

四日三時三十分から五時三十分、月曜日と木曜日は運動、火曜日は料理、水曜日はコンピューターと決められていて、どの分野を行ないたいかをアフタースクールに参加したい子どもたちが親と相談して決め、定員八名の子ども、スタッフ三名で運営されている。また、このスタッフも、多くのアフタースクールは、学校の建物を利用してはいるものの学校からは独立しているため、独自のスタッフが働いているが、マナースクールでは、私以外のスタッフは学校で日中働いているクラスアシスタントであるのも特徴的であろう。

## ある日のアフタースクールクラブ

（＊イニシャルは、子どもあるいはスタッフの名前）

いつものように、バスに乗るグループに分かれて子どもたちが集まっているホール（そこにアフター

スクールクラブの子どもたちも集まっている）に三時二十分くらいに到着すると、Nが「ボブ・ザ・ビルダー」のビデオの入った袋を、私のほうに差し出しながら、身体を恥ずかしそうに後ろに引いている。いつも、彼の二つの全く逆の思いを同時に見ることはあっても、そんなにはっきりと「これを見せたい」という思いを表現している時を見たことのなかった私は、Nの心の中で何かが構築されつつあるのかしらと嬉しく思いながら、彼に挨拶をする。長い冬休みからようやく帰ってきたというMが、旅行の話を嬉しそうにしてくる。L、D、O、S、A、今学期から新しく入ったDEにも挨拶をし、スーパーバイザーのTを待って、みんなで体育館へ行く。今日は、スポーツの日、サッカーをやりたいと口々に言っている。まずは身体慣らしに、とTがLとNに走るよう声をかける。「Run、Run、Run……」と跳びながら叫びながら、それは楽しそうに走る二人。しばらくして他の子どもたちとも交代する。黒人のOは、走るのが速い。身体を思い切り前傾にしてTがもういいよ、というまで走り続けている。DとMは体重があるせいか、途中で息を切らし休んでは、また走っている。途中で、Aが「トイレ」とその場からいなくなる。

そしていよいよサッカーの試合。スーパーバイザーのT対子どもたち。Tが「みんなが蹴る方向はこっちのゴールだよ」と何度も伝えてから試合が始まる。もう一人のスタッフのLIもいつの間にか来ていて、私と一緒に大声で子どもたちの応援。ボールを蹴りたい気持ちもあるけれど、怖くて前へ進めないDEが私の横に立っている。「ついておいで」

と誘って、私も少し参加する。何度か彼にボールを渡すが、他の子どもたちにとられてしまう。それでも、DEは楽しそうにしているので、今日はこれでいいのかなとも思う。Sはゴールキーパーの位置に立って、なんとなく、という感じでみんなのしているのを見ている。Sを見ていて、いつもこの「なんとなく」はなんだろうと思う。Aもようやく戻ってきた。彼は身体が小さい分、動きが早く、シュートを何度か決める。時々、落ち着きがないなあと感じる時もあるけれど、今日はAはすごいなあ、と感じる。しばらく試合が続いた後、みんな満足したような顔をしてアフタースクールクラブの部屋へ移動する。

部屋に入ってすぐに、絵を描き始めるN、それに続くL、A、DE。Mはおやつの準備をしているLIやTとの会話を楽しんでいる。Dは疲れたのか、ソファに寝転んでいる。テレビをつけて、子ども番組を見始めたS。Oは靴を脱ぎ始める。満足したのと、ちょっと疲れたのと、と漂っている時間。十分も経たないうちにおやつの時間となり、おなかのすいていた子どもたちは急いで手を洗いに台所へ行く。今日は、ピーナツバターかブラックカラントのジャムのついたトーストに、オレンジ、そしてクッキー。よく運動したせいか、とても静かによく食べよく飲む。

時には、おやつの後にも遊ぶ時間があったりするけれど、今日はもうバスに乗る時間になっている。彼らがコートを着て帰る支度をしている間に、コップ類を洗って私たちスタッフも帰る準備をする。少し急いでバスの所まで行く。私は毎日来ているけれど、このメンバーと遊ぶのは一週間に一度。また来週。

（ロンドン在住）